

Title: 「ちょっとそこまで。」



山本 友来
静岡の田舎で生まれ、栃木、新潟、埼玉で人格を形成し、京都で青春を過ごしたのち、中国の武漢という街で修行を積みました。2007年より再び学生に。懲りずにちょっくら出かけてきます。

● 最近のエントリー

- ☒ [Donation, Donation, Donation 101,102/183 \(6月28,29日\)](#)
(2009.06.30)
- ☒ [さらばバラナシ。99/183\(6月26日\)](#)
(2009.06.29)
- ☒ [インド人と、話す。92～/183\(6月19～24日\)](#)
(2009.06.27)
- ☒ [誰。ムンバイの真ん中で。90,91/183 \(6月17,18日\)](#)
(2009.06.26)

● アーカイブ

- ☒ [2010年04月](#)
- ☒ [2010年03月](#)
- ☒ [2010年02月](#)
- ☒ [2009年09月](#)
- ☒ [2009年08月](#)
- ☒ [2009年07月](#)
- ☒ [2009年06月](#)
- ☒ [2009年05月](#)
- ☒ [2009年04月](#)
- ☒ [2009年03月](#)

● 投稿カレンダー

● カテゴリー一覧

- ☒ [Cambodia](#)
- ☒ [China](#)
- ☒ [India](#)
- ☒ [Japan](#)
- ☒ [Malaysia](#)
- ☒ [Nepal](#)
- ☒ [singapore](#)
- ☒ [Thailand](#)
- ☒ [Vietnam](#)
- ☒ [旅の準備](#)

● ブックマーク

学校法人 日本写真芸術専門学校
NIPPON PHOTOGRAPHY INSTITUTE



RSS 2.0

ちょっとそこまで。 > 2009年06月 アーカイブ

09.06.30

Donation, Donation, Donation 101,102/183 (6月28,29日)

[Tweet](#)
[Check](#)


バラナシで、すっかり日本語・英語恐怖症とインド人不信に陥った私は、またしても観光地であるここブッダガヤで、どう外を歩こうか、と考えあぐねていた。

一般の人はいい人なんだけども、インド。ムンバイは、よかった。

「一般の人」と「商売目当ての人」がはっきり区別出来たから。

町全体が観光地みたいなのさ、まさにバラナシやみたいなのところでは、一見観光客相手の商売とは何も関係なさそうな顔をして近づいて来た人が、時間をかけて高い買い物させようとしていたりするから困る。

ここブッダガヤの商売人は、バラナシほど巧妙ではなく、もっと直接的に本題に入るから、やりやすいといえばやりやすいのだけど、それでも、3歩歩くたびに呼び止められていたのでは撮影にならない。

それに、日本人とわかると日本語学校に連れて行かれ、多額の寄付を要求されるという話はこの辺では有名だ。

興味が無いと言ったところで、ひとりしてくれと言ったところで、ずっとついてくる。

そう、つまり「ウザイ」のだ。

「ウザイ」。一まったくインドの日本語攻撃を表すためにあるような言葉だ。若者の語彙の貧困を助長している代表格であろうとも、ここはあえて使用したい。この状況を経験してしまったら、今後日本で簡単にこの言葉を使うことはないだろう。

そんなことを考えながら、インドの観光地で心安らかに撮影に専念するコツというものも、いくつか会得していた。

バラナシでの反省も踏まえて、ここでは日本語で話しかけられてもわからないふりをすることにした。

どうしてもしつこくてどこから来たのかときかれたら、台湾だ、日本語は話せない、英語も苦手だ、と言って会話を諦めてもらうことにしている。

台湾の若者はわりと日本人と服装などが似ているし、そもそも彼らも見慣れていないだろうから納得させられると思ったのと、対中国よりは国民感情がいららうと思ったこと、万一相手が中国語も話せる人だったとしても、私の中国語がネイティブではないことがわかるレベルの人は、この辺にはいないだろうと思ったからだ。

こんなやり方は誠実ではないかもしれない。でもこういう自分の時間を作るには、無視や嘘も必要なのだ、と割り切るほか方法が見つからない。



ブッダガヤのあるビハール州は、インドの中でも最も教育水準が低く、識字率が50%ほどだとい

う。
あちこちで私立の学校を見かけるが、学費の安い学校では、外国語と国語だけを教えているそうだ。

ブダガヤは観光地というだけあって、子供もわりと上手に英語を話す。
町の外れをカメラ片手に歩き、「コンニチワ、ドコ行くノー？○○寺行ッた？？案内スルヨー」というしつこい日本語の誘いを例の「I'm from Taiwan」作戦で巻いていたら、突然少年英語を話す5、6人に囲まれ、学校を見にきてほしい、と言われた。



英語とヒンディー語を教えるその学校は、日曜だったので授業は休みだったけれど、帰る家のない子供達が何人か暮らしていた。
わずかな電球と崩れそうな壁、外で授業をした方がましんじゃないかと思える薄暗さで、恵まれた環境とは言えなかった。
一通り教室を見終わると、オフィスに来てくれ、と言う。
予想通り、寄付の要求だった。
450名の生徒のうち、200名ほどが孤児だという。
ひと月の学費は500ルピー（約1000円）。政府からの援助は一切無いということだ。
そういうことは、全てこの卒業生らしき、まだあどけない少年たちに流暢な英語で説明させ、教師はhello.とひとこと挨拶をすると黙って私のポケットからお金が出て来るのを待っているだけで、それが私をやりきれない気持ちにさせた。

撮影するなら平日授業がある時がいいという思惑もあり、私は、「今は時間がないから、明日の朝もう一度ここに来て撮影させてほしい、その時に話を聞く」と言った。

約束があつて時間がない、というのも本当だったのだけれど、
彼らはこのまま逃げられては困ると思ったのか、しつこくホテルの名前を聞き出そうとし、
寄付をしてくれるという確かな約束をさせようとした。
一人で帰れる、と何度言っても、ホテルまで送ると言っただけで、5、6人に囲まれて来た道を戻った。
彼らはその間もずっと、明日はホテルまで迎えに行く、現れなかったらずっと探し回る、約束を破ったら悪いことが起きる、僕たちも悲しい、絶対に僕たちを助けると約束してほしいと指切りを迫った。
そのあまりに高圧的な態度に、
「まだわからないの!? 寄付の約束は出来ない、明日学校に行くことは約束する、何度も言うてるでしょう! 本当に不快だわ! もうひとりにして!」と思わず声を荒げると、目を丸くして引き返していった。

一晩考え、撮影させてもらおう礼の意味も込め、私なりに妥当だと思われる金額を寄付することに決めた。その金額とカメラ以外は一切何も持たずに、翌朝約束の時間前に出かけた。

前日に私が叱りつけたうちの4人が、教えてもいないのにホテルの前で待っていた。誰かが後をつけていたのだろう。

一人が遠慮がちに挨拶をすると、あとの3人は黙って通りの反対側をついてきた。
少年は私の表情をうかがいながら、目に入ったものの説明をしたり、カメラを褒めたり、インドの流行の音楽を聴かせてくれたり、前日ははうってかわってご機嫌をとろうと必死だった。なんだか苦笑いするしかなかった。

学校につくと、制服姿の生徒たちが屋上に行儀よく並び、朝礼をしている最中だった。
解散してそれぞれの教室で席に着くと、場違いなほど大きなカメラを持った私に向かって、扉もガラスもない窓から
helloとかコンニチワとか愛想良く声をかけてくれて、多くの観光客や日本人がここに連れてこられているのがわかった。
コンニチワ、という声がかかるたびに、案内役の少年たちは、台湾から来たフォトグラファーだよ、と訂正しているらしかった。
今更本当のことは言えなくなって少し罪悪感を覚えた。



一通り教室をまわって撮影を終えると、また例のオフィスに連れて行かれ、前日は違う先生が黙って隣りに座った。
少年たちは前日より慎重に言葉を選んで、寄付の打診を始めた。
「わかってる」
私が決めてきた額を差し出すと、その先生は不機嫌そうな顔で「No.」とだけ言った。
もちろん、「少ない」という意味だ。
少年たちは準備していたかのように「もっと必要だ。ここに来る人たちはみんなxxルピー以上は出してくれる。」と、私が出した10倍の額を提示してきた。

予想通りの展開に私は、
「私の○○ルピーには価値がないと言いたいのか? 私にとってこれは、とても貴重な○○ルピーなんだけど。」

と言って手を引っ込めた。
「私は今ポケットにある全部のお金を出している。○○ルピーか、ゼロルピーか、選ぶのはあなたたちだ。」
私がそう言うと少年は、先生の顔をちらっと見て、○○ルピーと答えた。
「それから」
机の上にあった出席簿に重ねたお札をはさんで席を立った。
「ツーリストにインドを変えることはできない。インド人だけがインドを、インドの教育を変えられる、私はそう思う。」
と、そこにいる全員にわかるように、ゆっくりと、言った。

「撮影させてくれて、ありがとうございました。」
と言ってオフィスを出ると、少年たちは送ると言ってついてきた。
先生だけは、最後までひとことも発しなかった。

別れ際に少年の一人が「今日ここであなたが僕たちの学校に○○ルピーを渡したって言うこと、誰にも言わないでね」と言った。
「なぜ？」とさくと、
「学校で撮った写真を国に持って帰るんでしょ？」と、答えにならない返事をよこした。

このような学校が、この町にはほかにもいくつかあるようだ。
通っている彼らに罪はない。
教えている彼らも、こうするほかはないのかもしれない。

通りすがりの旅行者である私には、私のあのお札が、正しく使われることを祈るほかない。



カテゴリ: [India](#)

post by 山本 友来 | 日時: 2009.06.30 | [パーマリンク](#) | [コメント \(4\)](#) | [トラックバック \(0\)](#)

[ちょっとそこまで。](#) > 2009年06月 アーカイブ

09.06.29

さらばバラナシ。99/183(6月26日)

[Tweet](#)

[Check](#)

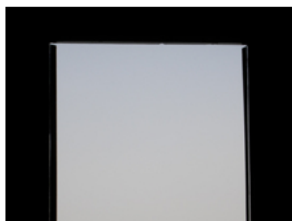
スクーリングのため長期滞在したマレーシアのPJを除けば、私がこの旅で一番長く滞在した町、バラナシ。
一日の過ごし方で、時間の流れの感じ方がこれほどまでに違って感じる町も珍しい。

朝5時前に外に出て撮影をし、朝ご飯のあと9時前からお昼まで撮影をし、夕ご飯までのんびりしたあと夜はフジャーというお祭りに出かける。
そんな一日に何度も外出した日は驚くほど一日が長く、反対にOFFと決めて外に出なかった日は、驚くほど時間が経つのが早い。

朝も夕方も、一日2度の食事に2時間ずつかけていた、優雅な時間(待たされるからだけど)。お気に入りのJapanese Foodは、どう見ても「カレーラーメン」と名付けた方が的確な「チーズラーメン」と、二人で一つで丁度いい、特大のオムライス(写真は、すでに上下から3分1ほど食べた後)。



愉快的スタッフと部屋からのガンガンの眺め。





町は観光客慣れしすぎていて外出の度にストレスがたまっていたけど、宿が全部癒してくれた。

滞在二日目で、シンガポールで修理したばかりのレンズがほこりにやられたバラナシ。
気温50度の中、それと知らずに歩き回って体調を崩したバラナシ。

そんな町とも、お別れ。

ガンガーでμの水中撮影をしなかったのが心残りではない。

気温50度超えの日、温度計を持って出たのに証拠写真を撮らなかったのが、これまた悔やまれてならない。そういえばチップカリー（ヤモリ）がひからびていたのはこの日だった。



(ちなみにエアコンOFF派の私の部屋、室温の最高記録は39.5度！でも風が入るから快適。)



さて、予約した車でブダガヤへ。
あれほど念入りに確認した、ビッグでコンフォータブルなはずの車は、こんな感じ。



やっぱり小さいじゃないか...
宿のおじさんが倍の値段で勤めてくれた「マハラジャタクシー」には、やはり及ばなかったか。

さらば、バラナシ。
ここにはいつかもう一度訪れることがあるような気がしている。

カテゴリ：[India](#)

post by 山本 友来 | 日時: 2009.06.29 | [パーマリンク](#) | [コメント \(0\)](#) | [トラックバック \(0\)](#)

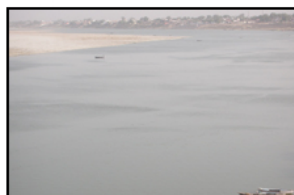
[ちょっとそこまで。 > 2009年06月 アーカイブ](#)

09.06.27

インド人と、話す。92~/183(6月19~24日)

[Tweet](#)

[Check](#)





各国の国民性をネタにしたジョークはいろいろあるけれど、インド人と日本人が登場するもので有名なものは、これだろう。

「国際会議において有能な議長とは、インド人を黙らせ、日本人にしゃべらせることが出来る者だ。」

一部の人を取り上げて全体を一般化するこの手のジョークは反発も多いかもしれないけれど、各国人が持たれているイメージは、やっぱりどこか当たっている気がして、私はけっこう好きだ。

そして身近にその国の人と接してみると、あらためてそのジョークの的確さに納得することも多いのである。



とにかくよくしゃべる。
こちらが一つ質問すれば100答え、こちらが1話すと100の質問を浴びせる。
こちらが黙れば延々と話し続ける。
そんなインド人に、何人か出会った。

中でもイチバン強烈なBという青年には、撮影の機会をことごとく奪われた。

「朝起きたら、まず何を考える？
人生をよりよくするために、僕は毎朝3時間瞑想するんだ。瞑想っていうのは...カクカクシカジカ...で、君は？え、何を考えるかなんて、決まってるじゃないって？人生をよりよくしようとは思わないってこと？じゃあさ、何が善で何が悪か、何が真実で何が嘘か、それは誰が教えてくれるんだい？自分の心で考えるって？じゃあ物事に会った時、精神と心と、どちらで先に感じるのだ？は？精神と心の違いがわからないって？まったくどういうことだ？じゃあ一体君は神や悪魔をどこで感じるのだ？信じていない！？じゃあ何を信じてるんだ？自然？
今日はたくさん質問をして、君を混乱させてしまったかな？どうだい？インド人と話すのは？ん？？」

...そんな、「楽しいです」としか言えないじゃないか。

彼はガイドよろしく見るもの見るもの全てに解説をつけてくれた。
もちろん頭んでもいないのに。
目に入る道具の神話の由来から、インド人の考え方で、
こちらが面倒くさくなって相づちすら打たなくなっても、おかまいなしだ。

バラモンの前を通り、解説がお布施の話になった時、しまった、と思った。
「インドには二種類の寄付がある、一つはバラモンに対して。もう一つは、貧しい人に対してだ。」

よく稼ぎ、よく与える、これが大事だと。
インドでは、手足のない人も、貧しい人も、そうやって面倒を見てもらえるんだ。
明日もここで9時に貧しい人がご飯をもらいに集まるんだ。君もあげることができるよ。参加してみる？
ところが日本では、路上で生活する人に誰も見向きもしないんだって？
人間は誰もがセルフフィッシュだからねえ...
と早口のインディアン・イングリッシュでまくしたてる彼は、きっと、日本の（インドに比べればずっと）手厚い社会保障制度なんか知らない。

日本の貧富の差は世界でもかなり小さい方で、貧しいことが原因で死ぬ人なんてほとんどいない、家のない人はほんのわずかで、それも多くの場合は自分で選んでそうしているわけで、...と説明しながら、だんだん自信がなくなってきた。
今、その制度にもほころびが見えてきているから。
でも、それだって。
一生抜け出せない差別だらけのインドよりはよっぽどいい社会だ、と言いかかって、止まった。

何をむきになっているんだ、と。
彼の挑発的なものいいと、自分の言葉の足らなさにいらいらしてくる。
たぶん一番腹立たしいのは、彼らの傲慢なほどの自信に満ちた論調に対する自分の思考のまとまらなさ、煮え切らなさ。
日本の方がいい。本当にそうだろうか？そう迷う自分が、言葉を曖昧にさせる。

なぜインドの彼はよくしゃべるのか？
それは彼に、迷いがなければならぬだろうか。
なぜ私は言葉に詰まるのか？

それはこれこそが絶対に正しい、と決められないからなのではないだろうか。

彼らのように、竹を割ったように主張がはっきりしていたら、どんなに楽だろう？

八方美人では作家になれない、と言ったのはS先生。

反発されるのを恐れて言葉を濁すのは、曖昧が大好き日本人である私の、ずるさんだろうか？？

曖昧さを捨てなければ、本当に「表現」はできないのだろうか？？



ところで。

これだけ長い時間を割いているいろいろな話をした（話に付き合わされた？）この彼とその仲間、実はこの数日後、ヒドイ騙され方をした。（ヒドイというのは損害の大小の問題ではなく、シチュエーションの問題）

敬虔なヒンズー教徒の彼の考える善と悪の基準は、私と同じではなかった、ただそれだけのことなのかもしれない。

でももし今度彼らに遭ったら、「あなたは日本人は信心も無く自己中心的だ、みたいな言い方をしたけれど、宗教心に満ちたあなたの国のように日常に詐欺が横行していたりしないわ」と、私なりの基準で言ってやりたい。

彼らを相手にしたとき、日本人の奥ゆかしさを改めて誇りに思うとともに、その強烈な主張力を、少し分けてもらいたいとも思うのだけれど。



※写真の人物と文中の人物は関係がありません。

カテゴリ: [India](#)

post by 山本 友来 | 日時: 2009.06.27 | [パーマリンク](#) | [コメント \(3\)](#) | [トラックバック \(0\)](#)

ちょっとそこまで。 > 2009年06月 アーカイブ

09.06.26

陰。ムンバイの真ん中で。90,91/183 (6月17,18日)

[Tweet](#)

[Check](#)

身分を細分化し、職業を固定化したカースト制度は、今では表向きはないことになっている。

昔からのカーストにない新しい職業（例えばIT関連など）に就くことでカーストの職業的縛りから抜け出す人が増えた大都市では、最近では自分の出身カーストを知らない人すらいる、ということも聞いた。

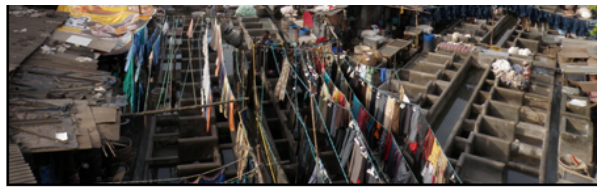
けれど、レストランに入れば、注文を取りに来る人とテーブルを片付ける人は違って、それぞれ決まった仕事しかしていないことは容易に気付く。

3000年もの間この地の人々に深く根付いて来た感覚は、法律などで簡単に変えられるものではないのだろう。

ドービーと呼ばれるカーストは、洗濯を生業としていた人々で、彼らがまとまって暮らしている地域を、今もムンバイで見ることができる。

ドービーガートと呼ばれるその場所は、マハラクシュミの駅を降りるとすぐに見下ろせるところに位置している。





中を撮影するには自称ガイドから高額な見学料を要求されるなどの見せ物的なシステムが作られていて、深く入り込めなかったのが残念だった。そのしたたかなガイドが、自身もドービーなのか、それともここに観光的価値を見いだした別の何者かなのか、私にはわからなかった。

チャンスがあれば、職人さんたちの仕事に対する思いなどを聞いてみたかったのだけれど。



ムンバイ中のホテルやレストランなどから大量に運び込まれるシーツや制服。脱水等一部機械化されているとはいえ、基本的には一枚一枚、石に打ち付けて洗うというやり方で、間近で見た彼らの仕事は、大変過酷なものだった。しかし、彼らが、おそらくは非常に安く提供した労働力によって、大都市ムンバイの目覚ましい発展を支えられているのだから、またもしこの仕事を全てのホテルが、レストランが、自前の洗濯機でやるようになってしまったら、ここで働く5000人とその家族は、きっと行き場がなくなってしまうだろう。



翌日の移動のためにホテルを移動したムンバイ最終日、ホテルからほど近い集落で火事が起こっていた。





避難所

前日に下見に来た時にも人懐っこい住人を大通りの歩道橋から撮影させてもらったばかりだったので、衝撃的だった。

17日→18日



火は18日の未明に起き、消火活動は真夜中近くまで続いた。
次の日空港でもらった新聞の数誌の一面に取り上げられていた。



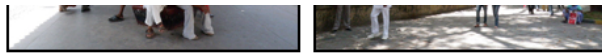
1名が死亡、28人がけが、消防車26台が出動し、300棟が焼けたこの火事は、ムンバイのここ15年間で起きた火事の中で最悪の規模だという。

ムンバイにはダーラヴィーという、かつてアジア最大規模とも言われたスラムがあり、映画『スラムドッグ ミリオネア』で主役の子供時代を演じた少年など数人の出身地でもある。今回火事になったのは、そのダーラヴィーがわずかに飛び地になったような所だ。
遠巻きに見ただけでも、無理やりに増築を重ねたような密集した作りで、防災対策などされていないのだから、火は広範囲に燃え移り、なかなか消し止められなかった。
このような劣悪な環境に暮らす人々が、ムンバイの中のダーラヴィーだけでもつい数年前の推定統計で100万人近くいるという。

都市のご真ん中、超一等地にあるスラムの存在は、急成長する国際都市の恥として見直され、現在は次第に縮小されつつあるようだ。
けれども、恥と思っている富裕層が豊かな暮らしが出来ているのは、この超一等地から安い労働力を得てきたからだ。また、スラムで産業を守って来た住人たちにとっても、スラムの解体は純粋に喜べる問題ではないはずだ。

そんな隙の部分を持つこの大都市で見かけた多くの貧しい人達は、私が想像していたよりずっと明るく、陽気だった。
アウト・カースト、スラム、貧困、格差...そんなネガティブなキーワードを、当人たちがどのよう
に受け止めているのか、知りたくなった。





目覚ましい発展を遂げながらも、矛盾を抱える街。

カテゴリ: [India](#)

post by 山本 友来 | 日時: 2009.06.26 | [パーマリンク](#) | [コメント \(1\)](#) | [トラックバック \(0\)](#)

[ちょっとそこまで。 > 2009年06月 アーカイブ](#)

09.06.19

3週間の我慢。90/183(6月17日)

[Tweet](#)

[Check](#)

地元の人でにぎわう食堂で、中年のインド人女性と相席になった。
腕を見ると、細かく美しい模様が描かれていた。

メンディーだ。

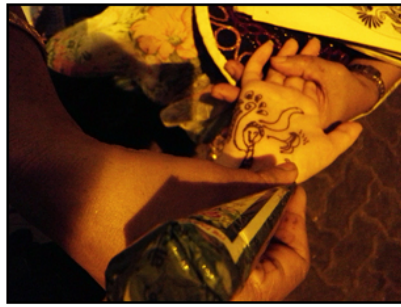
ヘナという染料で描かれるメンディーは、マレーシアでもインドでもたまに見かけてはいたけれど、これほどきれいな細かい模様のを間近で見たのは初めてだった。

私が褒めると、彼女は「そうでしょう。実は私、メンディーアーティストなの。すぐそこでやっているから、よかったらこの後あなたもどう？片腕500ルピーよ。」と持ちかけてきた。

もともと、マレーシアでやってみようと思いつつも、忙しくてチャンスを逃していたメンディー。500ルピーは高いけど、値切れば安くなるだろうと思い、デザイン集を見せてもらった。

何十種類もある中から、10分ぐらい悩んでようやくデザインを選び、値段交渉も成立。

いざ、ペイント開始。



お、おや？

なんか、線歪んでませんか？



熱心にデザインブックの柄と見比べながら、作業は着々と進んでいく。

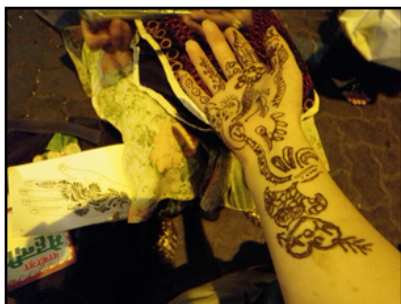
しかし見本とかなり違うような...

ていうか、全然違うぞ。



手首を越え、ひじの方に進出した頃には、もう見本すら見ていない彼女。

何のために10分もかけて選んだのか...



完成。

はっきり言って、ヘタである。

私ならもっとうまく出来そうだ、なんて思ってしまう。

そうか、よく考えてみたら、彼女の両腕の美しいメンディーは、彼女自身が描いたわけじゃないじゃないか。

不覚！

でも一生懸命やってくれたし。

幸いやってもらったのが手のひら側だから普段は見えにくいし！

このまま定着するまで一時間放置。



乾いたヘナを落とすと、残った色素はオレンジ色。

ますます子供の落書きみたいだ...



2、3週間で自然に薄くなっていくというけど、長いな...

※利き手が使えなかったので写真は全てオリンパス Tough-6000 を左手片手で撮っています。手ぶれ補正がついてよかった！

(この後バラナシで再会したトモカに見せたら、「見ようによってはさくらもこのイラスト風に見えるよ!」と慰めてくれた。確かに、そう思えば何だか味があって素敵かな。そのうち愛着がわくかも...)

カテゴリ: [India](#)

post by 山本 友来 | 日時: 2009.06.19 | [パーマリンク](#) | [コメント \(5\)](#) | [トラックバック \(0\)](#)

[ちょっとそこまで。](#) > 2009年06月 アーカイブ

09.06.18

ポリウッドでスクリーンデビューもいいかも。87/183 (6月14日)

[Tweet](#)

[Check](#)





インド門の近くを歩いていたら、
いつものように声をかけられた。
"Hello, how are you? Where are you from?"

いつもと違ったのは、名刺を差し出して来たこと。
地元の人ではない、と名乗るいかにも業界人風の格好の彼は、ポリウッ드의エキストラのキャスティングを担当している人だという。

ポリウッドとは、ご存知の通り、読める展開、分かりやすいストーリー、約束された結末、唐突な歌と踊りで有名なインド映画のことで、ここムンバイ（旧称ボンベイ）とハリウッドをもじってそう呼ばれている。

彼の用件は、こうだ。
明日の朝8時から夕方まで撮影があるから、来ないかと。
500ルピー（約1000円）の出演料と、食事が出る上、有名俳優の撮影風景が見られるし、写真も撮っていいと。

迷った。
すごく迷った。

出演料や食事はどうでもいいけれど、
ポリウッ드의舞台裏が見られるなんて！

行きたい行きたい。

ポリウッド映画に登場する膨大な数の欧米人エキストラはバックバッカーがほとんどだという
は聞いたことがあるし、英語版のロンリープラネットにも、インド門付近で一日500ルピーの
エキストラバイトに誘われることがあると書いてあるそうだ。
詐欺ではない、と思う。

でも、アジア人の募集なんて、きいたことない...
（私はどこからどうみてもアジア人。というかどこからどうみても日本人。）いったいどういう
シチュエーションで使われるんだ??

あやしい、と思えば、あやしい。

そしてここはインドだ。
日本を出る前に、旅の途中にも、たくさんの人からさんざん注意しろと言われたインドだ。

疑い始めると、なんだかその彼もどことなく胡散臭かったような気がしてくる。
...

一晩悩んで、行くのをやめた。
もちろんお詫びのメールを入れて。

危険な可能性は、1%かもしれない。
でも、万が一、何かあったら、
「自己責任」ではすまされない。
今回はそういう旅なのだから。

諦めるのも勇気。

せめて本場の映画館ぐらい体験しておこうか。



カテゴリ: [India](#)

post by 山本 友来 | 日時: 2009.06.18 | [パーマリンク](#) | [コメント \(2\)](#) | [トラックバック \(0\)](#)

[ちょっとそこまで。](#) > 2009年06月 アーカイブ

09.06.17

チェンナイ 84~86/183 (6月11~13日)

[Tweet](#)

[Check](#)

インドに入りました。



(教訓：砂浜にメッシュのスニーカーで行ってはいけない。)
指定泊のあとはムンバイへ。

取り急ぎご報告まで。

カテゴリ：

post by 山本 友来 | 日時: 2009.06.17 | [パーマリンク](#) | [コメント \(1\)](#) | [トラックバック \(0\)](#)

[ちょっとそこまで。 > 2009年06月 アーカイブ](#)

09.06.16

マレーシア最後の夜 83/183 (6月10日)

[Tweet](#)

[Check](#)

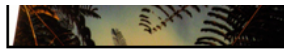
インド、ムンバイから更新しています。

マレーシア最終日、Photographers Night というイベントが行われました。
今回が2回目となるこのイベントは、我が校の卒業生、アンディ・ウォンさんとウォン・マンホーさんが主催するもので、アンディさんの経営するレストランKissatenの屋上で、メインゲストの写真家が作品のスライドショーやトークを行います。

ちなみに記念すべき第1回のゲストは、我が校フォトフィールドワークコース (FW) の考案者であり、教師として学生のよき相談相手であり、今回の我々のマレーシア滞在中の引率役でもある写真家長坂大輔氏。

私たちがマレーシアに入って約一週間後の、さる5月20日がその1回目でした。
その時の様子はこちら。





大盛況でした。

そしてこの日。

第2回目のゲストは、FW1期生であり、コニカミノルタフォト・プレミオ 2008年度の大賞受賞者であり、現在マレーシア在住の若手写真家、徳田敬太先輩です!!



写真に写るといつもお調子者に見えてしまいますが、とても真面目で尊敬すべき先輩です。



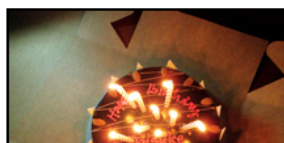
せっかくマレーシアで英語漬けの生活を送っていたところへ、我々4期生が一ヶ月近くお邪魔して日本語生活に戻ってしまったため、ご本人は英語でのプレゼンテーションの出来を心配してらっしゃいましたが、まったく問題なしでした。スライドショー後もテーブルに呼ばれては興味津々のお客さんの突っ込んだ質問に答えたりと、さすがです!



マレーシアでは写真と言えば商業写真や、いわゆる「美しい写真」を愛するのが一般的で、写真を芸術的に鑑賞する文化はそれほど育っていないようですが、お二人の作品を機に、マレーシアの写真愛好家の方々も、すこし違った刺激を受けられたのではないのでしょうか。

今後も定期的につけていく予定だというこのPhotographers Night。いつかゲストとして呼ばれてみたいものです。

さて、夜は長坂先生のお誕生日をお祝いし、





マレーシアとお別れも近づいてきます。

前半の旅の撮影データ、多すぎてDVDに焼くのを諦めた私は、長坂先生の協力で1.5TB（テラなんて位、去年まで知りませんでした）のHDDを手に入れ深夜までかかってコピー。



(徳田先輩撮影)

これで安心して後半も撮影ができます。

インドへの出発前夜の風景でした。

カテゴリ: [Malaysia](#)

post by 山本 友来 | 日時: 2009.06.16 | [パーマリンク](#) | [コメント \(0\)](#) | [トラックバック \(0\)](#)

[ちょっとそこまで。](#) > 2009年06月 アーカイブ

09.06.10

シンガポール写真展。76～80/183 (6月3～7日)

[Tweet](#)

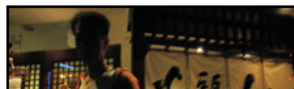
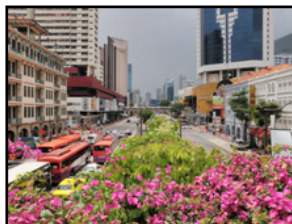
[Check](#)

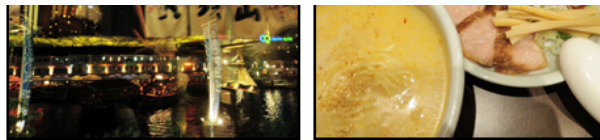
6月3日から4泊5日、4期生一行はマレーシアの施設をしばし離れ、シンガポールに行ってきました。

マレーシアからシンガポールへは、こんなバスで5時間ほど。



到着したシンガポールは、バンコク、クアラルンプールに滞在したばかりの我々から見ても、さらに垢抜けた印象です。





久々の日本式ラーメンに感激しつつも、メインイベントはそう、写真展です。



今年も日本、シンガポール双方のオリンパス・イメージング様のご協力で、実現した写真展。今回は例年とは趣向を変え、巨大ショッピングモールのフロアを提供していただいた写真展となりました。

そのおかげか、非常にたくさんの方に写真を観ていただくことができました。



シンガポールのオリンパス・イメージングの社長さんも、直々に会場に足を運んでくださいました。



展示写真は当ブログ同様、すべてこのFW中にオリンパスμThough-6000で撮られたもの。そして用紙はピクトリコ様から提供していただいたピクトリコプロ・フォトペーパーを使用しています。

来場された方からは、「コンパクトカメラでこんなにキレイに撮れるの!?」「素晴らしい!」「そのカメラ、見せて!」といった声をたくさんいただきました。



もちろん写真に対する感想やご意見もたくさんいただき、中には写真をきっかけに話題が広がって、数十分に渡りおしゃべりしてくれた方も! 来場者の方と直接お話が出来る、こういった機会はとても貴重です。

この写真展開催のために尽力してくださったオリンパス・イメージングの松崎様をはじめ、現地で会場、設営の手配をしてくださったアントニオ様、また五十嵐先生をはじめとして写真展企画段階からお世話になりました学校関係者の皆様、本当にありがとうございました。

カテゴリ: [singapore](#)

post by 山本 友来 | 日時: 2009.06.10 | [パーマリンク](#) | [コメント \(4\)](#) | [トラックバック \(0\)](#)

[ちょっとそこまで。 > 2009年06月 アーカイブ](#)

09.06.09

第一回スクーリングなどなど。 69-72/183(5月27~30日)

[Tweet](#)

[Check](#)

5月21日に我々4期生はマレーシアのベタリンジャヤという所にあるゲストハウス兼スクーリング施設に集合、約1週間後に控えた一回目の「スクーリング」へ向けて準備を始めました。

FW期間中には日本から先生方をお呼びして、二回のスクーリングが行われます。要するに、各国で撮影してきた写真を途中で一度見つけ直し、とりあえずまとめてみて、先生方

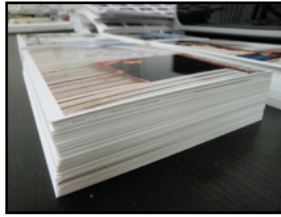
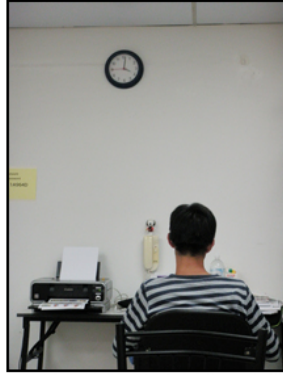
に作品の講評や今後の撮影への指導などをしてもらう期間です。
その一回目が5月のこの時期に行われるのです。

何しろ2ヶ月で撮影してきた膨大な量の写真全てに目を通し、セレクトし、プリントし、編集するところまでを数日間でごなすのですから、なかなか大変な作業です。

今年は少人数なので設備もスペースも余裕を持って使える！

と思いきや、例年に比べ皆かなりの撮影量だったせいか、全員が昼夜を問わずプリントしまくったため、全てのプリンターがほぼ24時間フル稼働、プリント用紙も写真を置くスペースも奪い合い！という状態でした。

時計は深夜を回り、机には100枚の束が次々と出来上がる...



こんな状態ですから、大量かつ上質なプリント用紙を協賛してくださったビクトリコ様には本当に本当に感謝です！！

一通りプリントを終え、編集しようにも、机の上には広げきれず、床にも侵出する始末...



外に出るのは買い出しと外食の時だけ、
ベッドで寝たのは2日に3、4時間...という超ハードな準備期間を終え、
いざ、スクーリングの始まり始まり。



一人5、6時間に及ぶ個別検討、そこでのアドバイスを踏まえての追加プリント、一人4、50枚に編集して全員参加での審査、そして旅全般についての個人面談...

準備期間中も含め、忙しさのあまりブログ用写真がほとんど撮れていなかったもので、詳しい様子は[長坂先生\(1\)](#)、[\(2\)](#)、[\(3\)](#)や[徳田先輩](#)のブログをどうぞ。

FWはその期間のほとんどが一人旅ですが、途中でこうしたスクーリングがあるからこそ、一人での旅の期間に自分がすべきことに気付けるのだ、と思います。

半年間海外に出て写真を撮ってくるだけなら今の私でも自分一人で出来ますが、集合があり、締切があり、事前に提出した行動計画の遂行義務があるからこそ、作品作りにおいて未熟な私のような者には、実に効果的な実習となるのです。

実際に参加してみて、そのことを強く実感しました。

今は、これまでただがむしゃらに撮り続けてきたものを冷静に並べてみて、さらに先生方へ方向性のアドバイスをいただき、ようやく自分が何をしようとしているのかのヒントが掴めた状態です。

これからが勝負。ここからがスタート。

そう思えた4日間でした。

遠路遅々着いて早々、帰国直前までほとんど毎日ホテルと施設の往復しか出来ずに我々の指導に時間を割いてくださった鈴木邦弘先生、飯塚明夫先生、長坂大輔先生、4期生が各自のことで精一杯でブログまで手が回っていなかった時に、しっかりと記録用の撮影をして下さっていた卒業生のウオンさんと徳田さん、機材室からプリンターとともに激励のメッセージをくださった冨田さん、斉藤さん、本当にありがとうございました。

カテゴリ: [Malaysia](#)

post by 山本 友来 | 日時: 2009.06.09 | [パーマリンク](#) | [コメント \(2\)](#) | [トラックバック \(0\)](#)

09.06.03

ちょっと一休み。57-62/183 (5月15~20日)

[Tweet](#)

[Check](#)

二週間で5つの町を撮影、という弾丸のタイ取材を終え、FW6カ国目のマレーシアへ。

出発から二ヶ月、あまりにもノンストップでスケジュールを詰め込んでいたので、そろそろ休息が欲しいところ。
スクーリング施設に荷物を置いて、ボルネオ島最大の都市、コタキナバルで5日間のバカンスを楽しんできました！



ちょっと高めのホテルでリラックス。
さっそくベッドに寝そべると、んんん？天井に何か貼ってある！



アラ- キブラ と読めます。
おお、これが、メッカの方向を示す矢印なのですね。
そういえば、ここマレーシアはイスラム教のさかんな国。
窓の外にもすぐ、モスクが見えます。

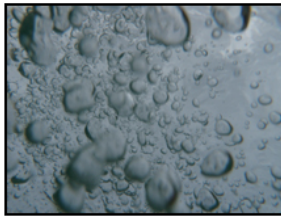


透き通ったきれいな海のお供には、
オリンパスμThough-6000が大活躍です！！





もちろん、お目当ては水中撮影。
シュノーケリングも、防水カメラと一緒に楽しさ10倍、時間を忘れてしまいます。



リゾート地でたっぷり身体を癒し、この後待っているスクーリングという怒濤の日々に備えた5日間でした。
つづく。



09.06.02

メーサーイ再び。53/183 (5月11日)

[Tweet](#)

[Check](#)

メーサーロンで知り合ったミャンマー籍アカ族のミージュさん。
(オリンパスユーザーでした!)



親戚がメーサーイのミャンマー国境でみかん畑とライチ畑をやっているという。
ちょうど翌日の飛行機の都合でメーサーイに早めに戻るかと考えていたところだったので、連れて行ってもらうことにした。



今はちょうど収穫の季節。
高い木に登ってかご一杯に枝をとり、仕分け小屋まで何往復もする男性たちと、
文字通り山のように積まれたライチの枝から葉をきれいにもぎとり、仕分けして箱詰めする女性
たち。
40度近い気温の中、一日働いて、男性が100バーツ (約285円)、仕分け作業はもっと低い給料
でやっているそうだ。



家族で働いている間、ちょうど今学校が長期休み中の子供たちは、お父さんやお母さんの仕事の
横で甘えたり、子供たちだけで走り回ったり、出し物を披露してくれたり。



この辺の人達はミャンマー語とタイ語と自分の民族の言葉とを少しずつ話せるという。

この子供たち同士はどうやらアカ語で話している様子。
5つの言葉が話せるミージュさんに「羨ましいな」と言うと、
「でもどれも完璧じゃないの。いちばん得意なアカ語でも、時々通じない時があるんだ。」
と少しはかんで答えた。

彼らは国籍はミャンマーだけれど、タイにある畑で、年間のほとんどの時期を過ごす。
そんな生活をするためには、書類や手続きが必要だという。
タイミャンマー国境は途中までは川で、途中からは山になっている。
正式な出入境ルートとしては、川にかかった橋のところのイミグレーションを通らなければならない。
が、一家で渡ればばかにならない出費、
そして何より、一週間に一度手続きのために山を下りて来るのは面倒だということで、
実際には最初にタイに入る時に一週間の申請をして入り、
何ヶ月かいてから帰りはこっそり山から越境して帰る、
なんて人たちもいるそうだ。

その現地人たちの公然の秘密ボーダーにも連れて行ってもらった。
ライチの林が続く限り、タイ側の平野が遠く見えるまで登ったところにそれはあった。



さすがに国境らしく、有刺鉄線が張ってある
...と思ったら、なんとその一部分にはしごが設置されている。



たった4段のはしごを越えたらそこはミャンマー。
申し訳程度に建てられた見張り小屋らしき小屋にも、見張りがいることはめったにないそうだ。
ちょうど私たちが見に行った時も、ミャンマー側からバイクで送られて来た若い女の子二人組が
慣れた足取りではしごを渡ってタイ側までやってきた。
越えたらもちろん密入国になるので、私たちは記念写真で我慢。



これも一つの国境のかたち。
昔はもっと自由に川を渡って行き来していたそうだ。
ミージュさんに言わせれば、
国境のこちら側にいてもあちら側にも、アカ族はアカ族。
彼らにとって、国境という政治的な罫は、無視は出来ないけれど、絶対的なものでもなく、適
当に付き合っていくものなのかもしれない。
メーサロンの中国人といい、国境とは関係なしに散らばっているアカ族といい、シャン族とい
い、民族や国籍について考えさせられたタイ北部での5日間だった。

カテゴリ: [Thailand](#)

post by 山本 友来 | 日時: 2009.06.02 | [パーマリンク](#) | [コメント \(1\)](#) | [トラックバック \(0\)](#)

[ちょっとそこまで。 > 2009年06月 アーカイブ](#)

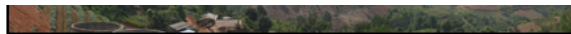
09.06.01

タイ北部、華人とアカ族の町 51～53/183 (5月9～11日)

[Tweet](#)

[Check](#)





メーサーイからバスとソンテオを乗り継いで、山道を限りなく上って行った所にメーサーローンはある。

高地でお茶どころとあれば、涼しいはず！
という期待は見事に裏切られた。



この町にいと、タイにいるということを忘れてしまう。
あちこちで目にする、漢字、赤い提灯、中華料理。
ここメーサーローン（美斯樂）は、中国系住民でいっぱいなのだ。

60年前に中国の国共内戦に敗れた国民党軍のうち、雲南、四川省方面に展開していた部隊とその家族は行き場を失いビルマへと移動し、その後ビルマ軍に追われタイ北部へと逃れて来た。
そうして落ち着いたのが、ここメーサーローンというわけだ。

軍の組織を維持して来た彼らも20年ほど前に武装解除し、かつてアヘンやヒロインの原料にするため栽培が行われていたケシ畑は茶畑に変わり、今は中国風の家並みと、アカ族の村とが平和に共存している。



←茶畑と雲南麺

市場でも、レストランでも、東洋系の観光客と見ると、当然のように中国語で話しかけてくる。
行きのソンテオで一緒になった中国人のバックパッカー（団体旅行が一般的な中国人の中では非常に珍しい！）の女の子とシェアしたゲストハウスも、華人の経営。
彼女はしきりに自分の国のパスポートは不便だとこぼしていた。

世界には、便利かどうかで、「こっちのどっておいたほうがいいんじゃない？」みたいなノリで国籍を選ぶ人もいる。
生活を少しでも豊かにするために、決死の覚悟で帰化しようと努力する人もいる。
アイデンティティ維持のために、どれだけ不利でも国籍を手放そうとしない人達もいる。
この町でも、いろいろな立場の華人に出会った。
10年以上かけてタイ国籍を取得した人、何年も挑戦しながら未だにタイ国籍がもらえない人、台湾籍で生活することを選んだ人...
日本人の両親を持ち日本生まれ日本で育ち、当然のように日本のパスポートに守られて旅行をしている私に、「自分が日本人（日本国民）であるというのはどういうことか？」「国家とは？国籍とは？国境とは？」という問いが投げかけられるのは、こんな時だ。

さて。
この町のもう片方の主役、アカ族の人達とも仲良くなった。



小さなガイドさん。



「※Y※o※x▲、カー」と、語尾しか聞き取れないけれど、一生懸命タイ語で説明しながら何キロもの道のりを案内してくれた。
心残りは、翌日もここで待ってる、というようなことを言ってくれたのだけれど、移動の都合で約束が果たせなかったこと。
写真を持って、また会いに来よう。

旅は出会いの連続。
この町で出会ったアカ族ミャンマー籍の女性に連れられて、再びメーサーイへ。
そこでも得難い体験が！
つづく。

カテゴリ: [Thailand](#)

post by 山本 友来 | 日時: 2009.06.01 | [バナーリンク](#) | [コメント \(0\)](#) | [トラックバック \(0\)](#)